

Title	史前學雑誌の発刊
Sub Title	
Author	宮島, 貞亮(Miyajima, Teisuke)
Publisher	三田史学会
Publication year	1929
Jtitle	史学 Vol.8, No.2 (1929. 8) ,p.151(317)- 152(318)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19290800-0152">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19290800-0152</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

が本書に與へられた諸氏の激賞を吝まぬ序跋文によりて本書の價値は充分に語られて居ると思ふ。次に編者の序説に依つて朝鮮古歌謡の大勢を窺つて見たい。

日本の萬葉などに該當すべき朝鮮の古い歌は俗に時調ジチヨと云はれ傳存し居る數は二千數百で、可なり古い時代から作られたものらしく、朝鮮語で作られ朝鮮人の思想感情を表現した古い文學として世に誇るべき唯一のものである。こゝに古歌を一口に時調と呼ぶのも、専門的に云へば誤りて、朝鮮の古歌を民謡や俗謡以外の——傳統的概念に依つて大別すると、時調ジチヨと歌ウタになり、歌の中には長歌が凡て入り、短歌の中心も界面調に屬するものは凡て包含される。又還山別曲等の如く何々曲、何々歌、何々詞——此等は特に歌詞とも云はれる——等と立派な題名を有するもの（普通の歌には所屬の詞名や曲名はあつても題名はない）も此の歌の部類に入るべきものである。その歌詞と云はれるのは大體に普通の歌より文句が長い。歌の内容や辭句の品位高卑に依つて時調と歌とを區別するのではなく、聲調に依つて區別するのであるから、一つの歌が平調（雄深和平なもの）羽調（清壯激勵なもの）で歌はれる場合はそれが時調に屬し、界面調（哀怨憤恨なもの）で歌はれる場合は歌に屬すと云ふ理窟で、又實際にもさういふ風になつてゐる。それで朝鮮古歌を一括して時調と云ふには少なからず無理があり、便宜上古歌を一口に時調と呼んで置き（歌詞だけは時調の中に入れてない）。その中に短歌と長歌とがあり、短歌が多く傳存して居る。

本書は最初に長歌を置き、次に中型歌、短歌の順で、短歌の中を圖るを以て目的としてゐるからして、本誌の活動は、期して俟

には又區別されて居り、その譯載量は都合五百五十八首で原歌の約四分一であるが大陸奥のものを除き、半島民衆の構想や感情を持つて譯はれたものは大部分收載せられ猶ほ附録として還山別曲外三種を加へ、更に讀者のために作家略傳と諸王在位年表とが記載されて居る。

最後に編者の、本書上梓に至る數年間の勞苦に對しては滿腔の敬謝の意を表すると共に編者の恩師窪田空穂、朝鮮語學研究の權威前間恭作、東洋文庫の石田幹之助の諸氏が半島同胞たる編者を誘導督勵し、且つ甚大の援助教示を與へられし事は學界の美談と稱し度い。（昭和四、七、八、武田勝藏）

### 史前學雜誌の發刊

今回公爵大山柏氏を中心とする史前學會より史前學雜誌が創刊さるるに至つた。

由來、學術が發展するにつれ、之が分課を生ずることは、蓋し自然の勢である。此の例にもれず、考古學の異常な發展に伴ひ、廣義な考古學の一分課である史前學を主體とした機關雜誌が生れたことは、寔に學界のため祝福すべき事柄といはなければならぬ。

本誌の遠大な使命抱負は、大山氏が「發刊の辭」に於て明快に述べられてゐるが、本誌は單に一部少數學者の専門的研究發表機關たるに止まらず、廣く學會の機關として、會員相互の研究促進

つべきものが、大いにある。

本誌は年六回、隔月に發行される。一號は三月に、二號は五月に公にされた。

次に一號の主要な目次を挙げれば、次の如くである。

「發刊の辭」(太山柏氏)、「史前學雜誌の發刊を喜ぶにつけて過去五十年の思ひ出」(有坂銘藏氏)、「日本に於ける史前時代の歴史研究に就いて」(喜田貞吉氏)、「我國石器時代の現況」(大山柏氏)、「隣生の銘を有する骨藏器に就いて」(宮坂光次氏)、「茨城縣小文開村中妻貝塚調査概報」(甲野勇氏)、「下總上本郷貝塚堅穴に就いて」(伊藤信雄氏)等である。此の他、資料文献の研究欄が設けられてあるのは、本誌の一特色であるに止らず、研究者を利する所、蓋し大なるものがあらう。

終りに臨み、前途洋々たる將來を有する本誌の大發展を祈つて筆を擱く。(宮島貞亮)

### Recent Revelations of European Diplomacy, by G. P. Gooch, 3rd.

Imp. with a supplementary chapter on the  
revelations of 1927.

Svo. 1x + 218 pp. London. 1928.

何といつても最近世史の玉座を占めるものは世界大戰である。近世に於ける諸般の發展傾向はすべてこの處にひと先づ集注せられ、これより出直して更に他の傾向に進まんとするかの如き觀が

ある。政治たるは外交たるは、はた經濟たるは思想たるを問はず、それはすべて皆この處に於て重大なる洗禮を受けたのである。これを中心として前後を比較對照するならば吾等はその間に著しい相違と發展或は頓挫と轉換を認めるであらう。隨つて之を中心としての研究は頗る複雑多岐に互り、又之に關聯せる著述は充棟も啻ならざるものがあつて、容易に手を染め難いのであるが、幸にカネーギー財團法人その他の機關によつてその包括的研究が試みられつゝあるのは誠に喜ばしい次第である。

その一面をなす大戰外交の研究は、その關係諸國並に當事者が現在なほこと直接の利害關係を有する點よりして容易にその真相を確かめ難いのであるが、大戰に基づく帝政崩壞その他の事情により、これなくしては知り得ざりしなるべき文書の暴露がドイツ共和國政府を手初に、その他の政府團體並に個人によつて續行せられ、之に關聯しての反駁・辯護等の著述も夥しく出版せられ、何時果つべしとも思はれないまでに至り、研究者を利したるも、研究その者は却つて複雑を加ふるに至つたが、多年英國の史界にあつて幾多の著述を出し、這般の事情に精通せる G. P. Gooch 氏のこの著述は、冷靜なる著者その人に接する如く、頗る客觀的な態度を以て、是等の著述、傳記、自叙傳、備忘録、辯明書、文書集等、頗る廣汎なる資料の間を憚る處なく縦横に馳驅し、獨、塊、露、近東諸國、佛、白・伊・西、大英國、米國、雜論の諸章に於て、互に關聯せる諸般の問題を捕へて、是等資料について、之を論評し乍ら、自己の見解をも併せてその中に開展させてある。本書は、もと一九二二年十二月二日大英國國際事情研究會(British